15万個の備長炭

㈶生協総合研究所客員研究員
川名　英子

５月の連休の一日，ボランティアに参加してみた。横須賀市田浦の港に隣接した元倉庫のギャラリーで，５月19日から11月末日までアメリカの作家の個展が開催される。そのコンセプトは「乾いた海と光と音」。参加したボランティアプロジェクトは，広い倉庫の空間に15万個の備長炭を糸で天井から吊し，「乾いた海」を再現するというもの。「ボランティアの手で備長炭を吊すという展示作業をする」というのは作家の意向であるそう。

「乾いた海」という難しい芸術性はわからなかったが，15万個という途方もない数の備長炭や，どう予測されたかわからない１日20人～40人のボランティア数，また，半年という信じられない展示期間などに興味を持った。もちろん「ボランティアをする」こと自身に興味があったことはいうまでもない。純粋なボランティア活動初体験なのである。

当日朝９時，田浦の駅から出てくる人達の殆どはその元倉庫に向かっている。ボランティア募集を芸術系大学に出したそうで，皆若い。若くない私達数人は種々の人伝ての情報によるのだろう。参加者名簿に記入して中に入ると，奥の方に，足場が組まれ，備長炭が少し吊されているのが見える。作業予定は５月１日から17日だから，３日当日の朝は17分の２進んでいたことになる。完成時の１割強か。ふーん。

９時に主催側からの説明や作家とボランティアの自己紹介があり，作業にはいる。私達がやったのは，備長炭の両端に決められた長さの黒糸を結び，足場に乗っている人に手渡すというもの。その極々単調な作業がなんだか楽しい。何故なのだろう？周りの若い人たちはおしゃべりまで楽しんでいるようだ。その華やいだ話し声の合間に備長炭を誤って床に落とす軽やかな音が響く。皆，薄黒化粧をしているではないか。

昼食には，お弁当が配られた。倉庫前に設営されたテントは満員で，私達を含め何人かは倉庫の床に座って，いま吊した備長炭を仰ぎみながらの食事である。３時のティタイムはテントの中で学生達と肩を摺り合わせながら雑菓子を食べる。それもこれもまた楽し。

楽しみついでに，ハンサムなギャラリーオーナーをつかまえて３千万円と噂されているこのプロジェクトの費用の出所やその主旨などいろいろ質問してみる。答えは芸術の話が入り込んでいてよく理解できない。ちょっといらだって「池田さん（オーナー）の道楽なんですか？」と聞くと「ビジネスです！」とこれまたいらだったように答える。ますますわからなくてさらに食い下がってみるが，わかったような，わからないような…。普

通の人間にはよくわからない世界が存在するのだと納得したことにする。

とはいえ，８時間近くの立ちっぱなしの作業，さすがに疲れてちょっと早めに手を洗って帰り支度。吊された備長炭が朝に比べて明らかに増えていることを確認して，夕方６時，労働の喜びを噛みしめながら帰途についたのである。その夜は，気分爽快，疲労困憊だった。

その後，プロジェクトは成功したのかなぁー，個展は開催されているのかなぁーと思い続けていた。本当のところ，「ボランティアの手で」ということだけをとっても，このプロジェクトの完成をかなり疑っていたのだ。先日，開催されていることを電話で確認して，見に行くことにした。作業したときの感激がよみがえって，期待に胸を膨らませた。

駅から倉庫まで歩いた。扉を開けると，自然の光だけの薄暗い「倉庫の中」である。たしかにいっぱい備長炭がぶらさがっている。だけど期待した何らかの感動はない。展示は「ボランティアの手による作業」にかなり意義があるのだと考えていたのに，パンフレットにはそのことは全く触れられていない。ちょっと違う感じ。若いボランティア達のあのエネルギーはどこへ吸い取られてしまったのだろう。吊された備長炭の他は，かすかな音（楽？）と，多分，海の底と思われるよくわからない映像だけ。もう少しわかりたい。作者は隣接している海を意識して会場を選んだということを思い出して，海岸に出てみる。夏の陽射しの中に，上半身裸の海の男達が数人，岸壁に腰をかけて談笑している。夏草が生い茂っている。倉庫に戻って，吊された備長炭の下を少し背をかがめて歩いてもみたが，やはり感動はない。退屈そうな係りの人に興味のあるボランティアの総数など質問してみると，ホームページを見ろという。期待しすぎたなぁ…とつぶやきながら帰途についた。

しかし，その夜，何故かあの倉庫の中の様子が目の奥に張り付いて，だんだん頭の中全体に広がって，自分があの中にいるような気持ちになった。何なのだろう…。

ホームページには期待したことがなかったので，E－mailでギャラリー側に備長炭の数やボランティアの数などの予想と実際の乖離について問い合わせた。その返答によると，かなり綿密な計画をしていたのでなんの不都合も起きなかったそう。

でもそういう割には結果の数字がはっきりしない。備長炭は，15万個より余計に用意していたので，２万個余った，と。ボランティアは希望者より実際のほうが少なかったが，大体予想どおり。延べ人数は数えてないが600人ぐらいか，と。そんないいかげんな情報，納得できない。「数値を切り口に芸術をみる」のは，無駄な話なのかも知れない。

それにしても備長炭15万個という数はどうはじき出されたのだろう。芸術を志す20才前後の学生といえば気まぐれの大先鋒のように私には思える。彼らのボランティア参加をどのようにほぼ正確に予測出来たのだろうか。半年間の展示期間の根拠は何なのか。愚人にはわからないことが多すぎた。